

旧石器時代

太田原 潤

青森県内の旧石器時代遺跡は隣接道県に比べても非常に少なく、未解明な点が多い。青森県立郷土館による蟹田町大平山元Ⅱ・Ⅲ遺跡の発掘調査及び報告書刊行は当センター設立前後であるが（三宅他1980、81）それ以前においても、また、それ以後においても両遺跡を凌駕する遺跡はいまだ確認されていない。当センター設立後の調査成果を概観するのが本号の趣旨ではあるが、それをもって県内の旧石器時代を叙述するにはあまりにも資料不足の感が否めない。そこで旧石器時代に限っては、この20年間を中心としつつも、関連する資料についてはそれ以前のものについても若干言及することとする。なお、大平山元遺跡群以前の研究史については大平山元Ⅰ遺跡の報告書に詳しい（岩本1979）。

遺構

検出することができた遺構は、大平山元Ⅱ遺跡で確認された石囲い炉のみである（三宅他 1980）。熱を受けた痕跡が観察される拳大の円礫がほぼ円形に並んだものである。

ナイフ形石器文化の遺物

ナイフ形石器は、東通村物見台遺跡、三沢市淋代遺跡、蟹田町大平山元遺跡、野辺地町獅子沢遺跡等で出土している。ナイフ形石器は旧石器時代の編年研究をリードしてきた石器であるが、県内での出土例は単発的なものが多く、火山灰との関係が把握できるものもないため、他地域との比較は困難である。また、定量的な分析もできないため、技術や形態の比較も困難なものが大半であるが、獅子沢遺跡採集例は素材の用い方、調整のあり方に東山型ナイフ形石器的要素がうかがえる。

尖頭器文化の遺物

尖頭器は大平山元Ⅱ・Ⅲ遺跡等で出土しているが、特に充実しているのは大平山元Ⅱ遺跡である。接合資料の分析を通じて大平山元技法A、Bが提唱されたが、前者は槌状剥離を有する尖頭器に関わる技法、後者は湧別技法に関連する技法とされる（三宅1980）。県内の旧石器資料は他県の資料と比較しにくいものがほとんどであるが、技法Aについては当初から長野県男女倉遺跡や千葉県東内野遺跡との対比が試みられた（三宅1980）。その後、類似資料が北海道を除く東日本各地から報告されるようになり、それらの集成や再評価もなされている（川口1988、1989他）。

細石刃文化の遺物

細石刃文化関連の資料は、大平山元Ⅱ・Ⅲ遺跡、木造町丸山遺跡、横浜町吹越遺跡、五所川原市隠川(2)遺跡等で出土している。大平山元Ⅱ遺跡では、舟底形石器や大平山元技法Bによる石核が確認されている。技法Bは湧別技法の母体となったとの見解も示されているが、両遺跡からは湧別技法そのものを示す細石刃や石核は出土していない。湧別技法に関連した接合資料は、大平山元Ⅱ遺跡の1989年の調査でも複数得られている（横山1992）。それらは両面調整のブランクから複数本のスキー状削片を剥離する点では湧別技法と共通するものであるが、細石刃は剥離していない。この時の調査では他に荒屋型の範疇で捉えられる彫刻刀形石器も出土しており、石器製作技術だけではなく、石器組成の面からも湧別技法との共通性がうかがわれる。荒屋型彫刻刀形石器は隠川(2)遺跡の調査でも1点出土している（山口 2000）。

1998年に県立郷土館が実施した丸山遺跡の発掘調査でも湧別技法との共通性がうかがわれる削片系細石刃の関連資料が出土している（大湯 2000）。ここでも細石刃そのものは検出できなかったが、細石刃石核、削片、搔器、削器等が出土した。他時期の遺物の混入が考え難いことから、限定された一時期の石器組成がある程度把握できた例としても貴重である。同遺跡発掘調査の契機となったのは1981・82年に1点ずつ採集された細石刃石核である。1点は珪質頁岩製の削片系のものであり、もう1点は黒曜石製の非削片系のものであった。異なる技術、形態の両資料の関係を把握するのが調査の主眼の一つであったが、発掘調査では非削片系の細石刃石核は得られなかった。周辺に分布が広がる可能性もあるので今後の調査が望まれる。

大平山元Ⅲ遺跡でも丸山遺跡同様黒曜石製の非削片系細石刃石核が採集されている。これらは野岳・休場型の範疇に属するものとして西南日本との関連が指摘されたものである（三宅1981）。黒曜石の原産地が注目されるところであったが、その後の分析で両遺跡とも県内産黒曜石を使用したものであることが判明した（福田1990）。

その他の資料

上記諸遺跡の他にもこれまでに旧石器時代の資料として紹介されたものがあるが、再検討の必要があるものが少なくない。六ヶ所村発茶沢遺跡例（三宅1982）は旧石器時代の搔器として位置付けることも可能ではあるが、層位的には縄文時代草創期の可能性も残る。今別町山崎遺跡からは削片、舟底形石器が報告されているが、これらも技術的、層位的に再検討の余地がある（畠山・小笠原他1982）。平館村尻高（4）遺跡、青森市三内遺跡からは石刃状の剥片1～2点が旧石器時代のものであるとして報告されている（岡田他1985、桜田・石岡他1978）。しかしこれらについても、積極的に旧石器時代に位置付けるにはさらなる検討が必要と言わざるを得ない。また、佐井村沖海底、小泊村沖海底123mから引揚げられた尖頭器についても旧石器時代から縄文時代草創期にかけての遺物としての報告がある。後者は更新世末の海面上昇により遺跡が水没したものと解釈しているようであるが（小泊村史編纂委員会1995）海水面の変動について誤解があるように思われる。遺跡自体が水没したというより、縄文人の海洋活動を反映したものと考える必要もある。

他に六ヶ所村幸畑（7）遺跡も旧石器時代の遺物としてしばしば紹介されるが（大湯1988）石器組成的にも層位的にも神子柴長者久保文化期のものと評価することが可能である。平賀町太子森遺跡例（葛西他1983）も同様である。

まとめと課題

これまでみたように、この20年間の県内の旧石器時代研究は大きな進展を見せたとは言えない状況にある。今後の展開を望むには、何をおいても資料の蓄積が急務となろう。遺跡を見つけるには鍵層となる火山灰を把握する必要もあるが、県内では他地域と比較する上で重要な広域火山灰の検出例も極めて少ない。これまで始良丹沢火山灰（A T）、阿蘇4、洞爺等の広域火山灰は確認されているものの確認地点は限られている。A Tは旧石器時代の編年研究上最も重要な広域火山灰であり、遠隔地の石器群を対比する場合の鍵層としての役割は大きい。残念ながら本県ではA Tとの関係が層的に把握できる石器群は未検出であるが、木造町出来島海岸では泥炭質の露頭中に5 mm前後の層厚でA Tが堆積している（辻1993他、町田他1992）。同海岸は埋没林がある場所として近年脚光を浴び、観光地化しつつあるが、A Tはその埋没林の直上で観察される。解説板、各種案内等にA Tのことは触れ

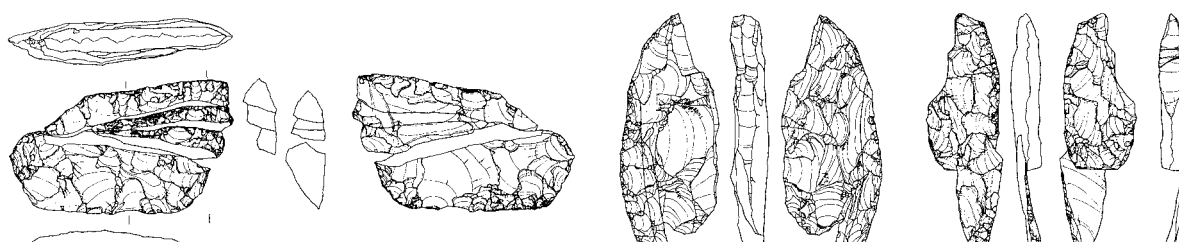
られていないが、埋没林の年代決定の決め手となったのはA Tの降下年代であった。この埋没林はA T降下直前のこの地域の植生をよく留めたものとしても重要である。ここではA Tの上位にも泥炭層が堆積しているので、最終氷期最寒冷期前後の自然環境変遷史がこの露頭にはパックされていることになる。遺物こそ出土していないものの旧石器時代の自然環境を知る上でも重要な露頭である。阿蘇4、洞爺は前期・中期旧石器を探す場合の手がかりになるものと思われる。

県内の遺跡調査で分析に供される火山灰は、層、またはブロックとして検出された高純度のものがほとんどであり、鉱物分析レベルで同定が試みられた例はほとんどない。偏西風と火山の位置関係から本県は広域火山灰が飛来しにくいという制約はあるが、火山灰の検出、同定法にも再考の余地がある。ローム層についても給源等が不明確なものが多く、今後はより微視的なサンプリング、分析の蓄積が必要である。

先に見たように神子柴・長者久保文化期の遺物がしばしば旧石器時代のものとして報告されている。同文化期は、大平山元Ⅰ遺跡や茨城県後野遺跡で無文土器が出土したことから縄文時代草創期として位置付けるのが一般的となっていたが、1998年の大平山元Ⅰ遺跡の調査で出土した土器に付着した炭化物をAMSで年代測定し、暦年較正を施した結果、約1万6千年前との数値が得られた（谷口他 1999）。これについては測定法が変わっただけとする過小評価の声もあるが、重要なのは、蓄積されつつある最終氷期の自然科学研究の成果と暦年で対比可能になったことである。これにより、土器が如何なる環境のもとに出現したかが再考を迫られることになり、それと旧石器時代の関係、更新世から完新世へという地質学的な移行期との関係についても検討が必要となった。

この20年の間に県内の神子柴・長者久保文化期およびそれ以降の縄文時代草創期の様相は徐々に明らかになってきた。土器出現は考古学的に大きな関心事であるが、そのプロセスを解明する上でも県内の旧石器時代を追究することは意義深い。また、津軽海峡を挟んで北海道と対峙するという地理的な特徴にも興味深いテーマが多数潜んでいる。今後より一層の資料の蓄積が望まれる。

（青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護総括主査）



大平山元Ⅱ・Ⅲ遺跡出土石器接合資料